

## アレクサンダー・クルーゲ——感情の年代記

三島 憲一

## 1 20世紀の暴力のコーラージュ的再構成

クルーゲは2000年にそれまでに書かれ、出版された短いテキストの多くを集め、『感情の年代記 (Chronik der Gefühle)』と題して出版した。全2巻3千ページ以上にわたる、いわゆる長尺物である。しかし、これでも彼の全著作の半分にも満たない。それどころか、その後もまた次から次へと出版している。そのうえによく知られているように映画製作者としての映像作品も合わせれば、膨大な作品群となる。とはいえ、『感情の年代記』というこのタイトルが彼のテキスト群を象徴しているので、以下の簡単な紹介のタイトルともしてみた。いずれにしてもどの分野であれ、ドイツのことに関わっていないながらクルーゲの作品と出会わなかったというのは、海外の日本研究者が個々の専門分野はなんであれ、大島渚や寺山修司、そして長嶋茂雄や宇多田ヒカルの名前を聞いたことがなければ、その日本の知識も少し怪しいと思わざるをえないのと同じである。

それではこうしたクルーゲの無数のテキストの奥にはどのようなコンセプトがひそんでいるのだろうか？マルチメディア作家の彼が残してくれているこうした仕事群、伝統的なテキストの概念を部分的には逸脱し、さらには乗り越えているこうした仕事群はなにを意味するのだろうか？

例えば『感情の年代記』という総合タイトルのもとわれわれの眼前にあるのは、大抵は短いテキストと他者の日記や手紙や官公庁の文書からの本物の、あるいは本物らしき引用（多くは拵え物の「引用」）のコーラージュである。そうした文書を書いた人も有名・無名の歴史上の人物、あるいは虚構の人物である。それに多くは写真や図版が添えられている。その多くも本物であったり、拵え物であったり、よほど調べないとどちらであるかわからないほど迫真の写真や図像であったりする。また自分で描いた絵やグラフもある。「詩的なるものとは収集の活動です (Das Poetische ist eine Sammeltätigkeit.)」と、クルーゲは『ツァイト』紙とのインタビューで述べている<sup>(1)</sup>。ベンヤミンの収集癖を思い起こさせるほどだが、こうしたさまざまな、ほとんどオブジェと言っているいい言語とイメージからなるコーラージュ群で彼クルーゲは、なにをしようとしているのだろうか。それにながそれほど彼の人気の元なのだろうか。クルーゲが大学で講演すれば大講堂が満員になる理由はどこにあるのだろうか。

扱われる主題は、その多くが20世紀の破局のさまざまな側面である。20世紀は

(1) Der Friedensstifter, Interview mit Alexander Kluge. In: Die ZEIT, 23. Okt. 2003)

数かぎりない破局を特徴とするが、そのなかでもクルーゲがドイツ人である以上、ナチ時代の占める比率が高い。とはいっても、ヘラクレイトスやターレスの哲学も出てくれば、ローマ時代や中世の戦争の話にも触れられている。全体としてはヨーロッパ大陸で起きたことに限定されている印象は拭えないとはいえ、一面的との批判は当たらない。例えば、サー・ラドクリフが行った悪名高いパキスタンとインドの分割と国境線確定も扱われている。ケンブリッジ大学出のラドクリフは第二次大戦直後にこの仕事に関わるまでは、インドに行ったことがない、というから驚きだ。また、世界の植民地分割に参画する日本の話も一箇所だが触れられている。

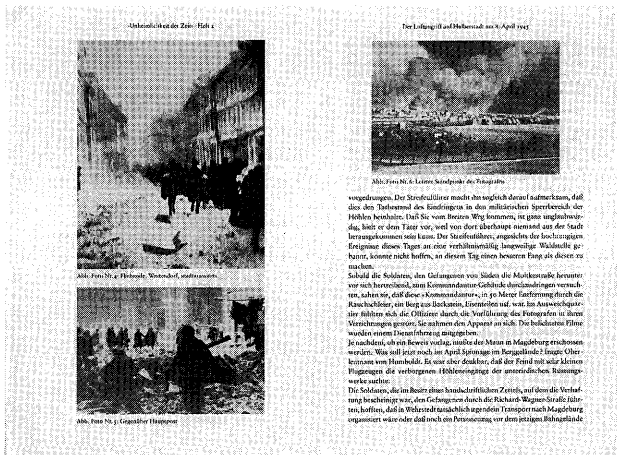
これまでクルーゲを読んだことのない方々でも、ここに挙げた具体例で想像がつくと思われるが、こうしたテキスト群の主題は、アドルノの響みに倣っていえば「暴力の連関 (Gewaltzusammenhang)」ということであろう。しかも、現代史におけるそれであり、同時に、日常の目に見えない暴力性でもある。もう一度言うが、現実の、あるいはフィクションの、あるいは現実には起きていてもおかしななかった現実的フィクション (Realfiktion) としての暴力に関わるさまざまなエピソードやシーンがコラージュ的に重ね合わされているのが、クルーゲのテキストの特徴である。それがどのような意味を持っているかを、以下に簡単に論じてみたい。

ここでいう暴力の連関とは、神話が語るアルカイックな暴力状況でもあるが、クルーゲの多くの映画で告発されている日常のジェンダー関係でもある。だがまた、そしてそれ以上に資本主義的な階級構造と、それに由来する公共圏の歪みであり、さらには20世紀の戦争である。こうした資本主義と戦争の関連、公共圏の歪みについてクルーゲは、1972年にオスカー・ネクトとともに理論的苦闘を経た共著『公共圏と経験。市民的公共圏とプロレタリア的公共圏の組織分析』<sup>(2)</sup>を世に問い、当時は激論の素材となった。同じ二人による『歴史と独自性』<sup>(3)</sup>も有名になった。どちらも70年代、80年代にはいわば Kultbuch であった。

公共圏と経験の関連を扱った最初の本は、ナチ時代の分析であるとともに、ベトナム戦争にまつわる一連の嘘をも扱い、最終的には帝国主義論となっている。本書はネオマルクス主義のジャーゴンに溢れ、今日読むととくに消え去った別世界からの声を聞くかのようなのである。とはいえ、そこにはナチ支配についての今日でも通用する鋭い分析があることはまちがいない。ネクトとの二つ目の共著は、当時の社民党 (SPD) と自由民主党 (FDP) の連立政権に対する定義し難い

(2) Oskar Negt/ Alexander Kluge, *Öffentlichkeit und Erfahrung. Zur Organisationsanalyse von bürgerlicher und proletarischer Öffentlichkeit*. Frankfurt am M.: Suhrkamp, 1972.

(3) Oskar Negt/ Alexander Kluge, *Geschichte und Eigensinn*, Frankfurt am M.: Zweitausendeins, 1981.



### 空襲の様子。写真家の最後の写真もある

出典：Chronik der Gefühle, Bd. 2, S. 32-33.

ながら広まっていた不満を代弁しながら、いわば空気の中に漂い始めていた新たなエコロジー運動、フェミニズム運動の兆しを感知し、描き出したものである。

## 2 ハルバーシュタット大空襲—ドイツに苦しむ

クルーゲの宇宙に馴染んでいない方々のために、彼が記す無数のエピソードからいくつかの例をあげてみよう。そのひとつは、彼の故郷ハルバーシュタットへの空襲のシーンである。戦争も末期の末期である1945年4月8日にハルバーシュタットはイギリス空軍を主力とする連合軍の徹底的な爆撃を受けた。当時まだ幼かったクルーゲにとってはトラウマである。爆撃開始のほんの少し前、この町一番のホテルのレストランでは婚礼の宴が始まっていた。花嫁と花婿およびその家族が向かい合って座っていたのだ。ケルン出身の花嫁の家族はいわゆる中産階級、それに対してこのハルバーシュタットの市民である花婿は下層階級の出身であった。したがって両家の会話もどこかぎこちなく、話はずまない。共通の話題が見つからない。初対面同士でもこのような席なら当然の、ファーストネームで呼び合い、Duで話し合うところまでもなかなか進まない。戦争中といえども階層の違いは露骨である。その瞬間にホテルに爆弾が炸裂し、席にいた人々は一瞬にして瓦礫の下の焦熱地獄で焼き尽くされる、社会的格差ごと焼き尽くされる。戦争という悲劇と階層格差という悲しい話とが巧みに縫い合わされている。

ほぼ同じ時刻に中産階級の静かな住居でジークフリート・パウリという少年がヴェルディの『ファルスタッフ』の一節を練習していた。それが終われば、『リゴレット』に出てくるジルダのアリアに進めるはずだった。そこに爆弾が降って

くる。「我が家の地下室から5メートルと離れていないところに爆弾が落ちた」<sup>(4)</sup>とパウリは話す。だが、ここからが重要だ。空襲でなにかも、つまり自分の家も大好きなグランドピアノも焼けてしまったパウリが街をさまよっていると、同じく通りを歩いているピアノの先生に会う。先生は、こんな状況ではとてもレッスンはできない、と断るのだが、それでもこの少年は諦めずに、焼け残った立派なお屋敷のなかにグランドピアノを見つけて、「どんなことがあっても潰されない不屈の意志」に駆り立てられながら、それから2時間というもの、今日の課題曲を徹底的に練習し、完璧にマスターしてしまったのだ。

この話は、1990年、ドイツ統一を機にゴダールが作った『新ドイツ零年 (*Allemagne année 90 neuf zéro*)』(「新」がついているのは、ロベルト・ロッセリーニによる1948年の『ドイツ零年』を受けてのことだが)のなかで、少年がピアノを練習しているシーンを思い起こさせる。窓からは遅い午後の鈍い光が差し込んでいる。中産階級の安定(ドイツ語で言えば *bürgerliche Geborgenheit*) そのものの風景だ。そこに背後からコメントが入る。「戦争中でも彼らは文化と教養の練習に耽っている。奇妙な国民だ」。こうした教養への献身は、日常性への、つまり、ノーマリティへのきわめて「ドイツ的な」固執として、クルーゲでもゴダールでも暴かれている。

ここにはクルーゲの重要なモチーフがある。それはドイツのあり方に苦しむ経験、トーマス・マンのいささか大袈裟な表現を使えば、*Leiden an Deutschland* である。ハルバーシュタットの空襲を扱った長い文章の中心的な一節、つまり映画館を爆弾が貫通するシーンにもこのドイツ的ノーマリティへの欲求が、*Leiden an Deutschland* の一環としてアイロニカルに描かれている。上演されていたのは、ナチの有名な宣伝映画『ドイツへの帰郷』である。爆弾が破裂した直後に、映画館の事務係でもあり、窓口の切符売りでもあるシュラーダー夫人は、観客ホールが破壊されたことをすぐさま無視し始めた。「空襲のあとの瓦礫を掃除するための大きなほうきを使って彼女は、14時の上演に間に合うようにと掃除を始めたのだ」<sup>(5)</sup>。「映画館業務の経験豊かな専門家であるシュラーダー夫人にとっては、午後の4回の上演時間のスケジュールに抵触するような激しいできごとはあってはならないのだった」<sup>(6)</sup>。観客ホールは壊れているのに、次の上映の準備をするというのもグロテスクだが、自らが受けたショックを押し殺し、感情を抑えてまずは秩序への愛を優先させるこうした態度は、ドイツ諸都市への空襲を扱ったゼーバルトの本でもテーマ化されている<sup>(7)</sup>。また戦後間もなく回復した経済体制を論

(4) Alexander Kluge, *Chronik der Gefühle*, 2 Bände, Frankfurt: Suhrkamp, 2000, Bd. 2, S. 73.

(5) Kluge, *Chronik der Gefühle*, Bd. 2, S. 28.

(6) Ebenda.

(7) W・G・ゼーバルト(鈴木仁子訳)『空襲と文学』(白水社, 2008年) [Winfried Georg Sebald,

じたクルーゲとネークトの議論、つまり「生産公共圏（Produktionsöffentlichkeit）」を論じた議論でも生産のための秩序愛好が問題化されている<sup>(8)</sup>。

同時にまた町の塔の上から敵の飛行機を確認し、高射砲部隊に情報を無線で伝達する役割の女性たちについてもクルーゲは同じ問題意識で語っている。無線での報告は乾いた軍事用語の連続だが、突然塔にも爆弾が落ち、任務に忠実な女性たちも一瞬にして地上から消え去る。必ずやられるのだから逃げればいいのに、と我々なら思うが、彼らの任務遂行の態度はまさにノーマリティへの愛という倒錯そのものだ。

それに続いて町の写真屋の話がある。この写真屋のおじさんは空襲の飛行機が飛び去った午後、廃墟となった町の写真を撮っていた。おそらくは骨の髄まで染み込んだ職業意識と記録への義務感からであろう。ところが彼はその撮影ゆえに逮捕され、その夜のうちに近くの大きな町であるマグデブルクに連行され、即決裁判で銃殺されてしまった。理由は、ハルバーシュタットの郊外の丘陵地帯には地下に秘密の兵器生産工場があり、写真による軍事機密の発覚を軍が恐れたためである。その工場で働いていたのは、もちろんポーランドから強制連行されてきた徴用工である。このように数多くのモザイク的な断片を組み合わせた、この日のタブローができあがる。それはナチ体制の戦争末期の構造を全体として浮き上がらせる。概念と直観が見事に結合している。

そしてこの空襲記録のある箇所には「すべては組織化の問題だ」とも記されている<sup>(9)</sup>。この組織化の力によって、北海からアルプスを抜けてアドリア海の岸辺に至る水路とトンネルの建造もナチスは考えていたとされ、その水路と通過する船の様子のイラストもクルーゲは提示している。個人の夢と幻想が団体の組織化の力と溶融し合うシーンである。

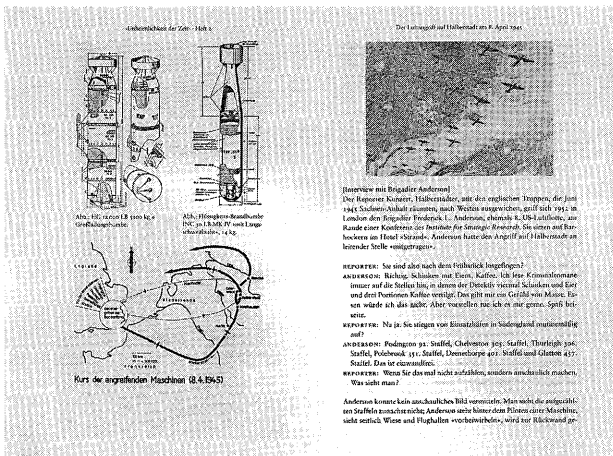
この組織化のタブローでは、ドイツ問題を離れて、イギリス空軍の作戦計画にもこの組織化の力が確認されている。クルーゲは文章だけでなく、イギリス空軍の指揮官たちの姿、編隊飛行の組み方、爆弾などの写真や図解を用いて、組織力を証査する。例えば爆撃の方法も詳しく描かれる<sup>(10)</sup>。爆撃手はまずは道路の真ん中に深く掘り込む爆弾を落とす。水道管を破壊して、消火活動を不能にするためである。その次に家々の屋根を貫く重たいだけの爆弾を落とす。多くは地下室まで貫通する。そこに開いた巨大な穴に後から来る飛行機が次から次へと焼夷弾を注ぎ込んで火事を引き起こすという作戦手続きも、つまりその組織力も詳しく紹

*Luftkrieg und Literatur: Mit einem Essay zu Alfred Andersch*, Frankfurt am Main: Fischer 1999]

(8) Negt/ Kluge, *Geschichte und Eigensinn*, Kapitel II, Deutschland als Produktionsöffentlichkeit.

(9) Kluge, *Chronik der Gefühle*, Bd. 2, S. 47.

(10) Kluge, *Chronik der Gefühle*, Bd. 2, S. 56.



Royal Air Force についての図解など。

出典：Chronik der Gefühle, Bd. 2, S. 58-59.

介されている。

「空飛ぶ要塞」と言われた B16 の写真や図面も掲載されている。こうして想像を超えた規模の戦争装置が、ハイデガーの響みに倣って言えば、現代の戦争システムの巨大さ (das Riesenhafte) が、その個々の要素とともに浮かび上がってくる (ハーバーマスとはちがひ、クルーゲはハイデガーからの知的刺激も受け入れている)。個々の要素には、クルーゲによれば、もちろん陽動作戦も含まれている。最終的にはハルバーシュタットを壊滅させることになるこの爆撃機編隊はドーバー海峡を渡った後、当初はフランクフルトに向かうふりをしていて、それに見合った種々の交信やサインを出していた。ドイツの防空陣営を欺いたのちに、突然進路を変更してハルバーシュタットに襲いかかったのだ。そして下界では、社会的矛盾を押し隠しながら婚礼の宴が始まろうとするところであり、郊外の軍事工場ではポーランド人が過酷な条件で働かされていた。

3 スターリングラード—個別の出来事の重要性

同じような仕組みで多様な角度から描かれているスターリングラードをめぐるコラージュにも触れてみよう。例えば一見すると瑣末なことが描かれる。極寒のスターリングラード郊外、マイナス30度以下で、どの程度の積雪量になるとドイツ機甲師団の戦車のキャタピラですら滑って空回りし、部隊の進行が止まることになるのかについての分析がなされている。それぞれ温度が違う時に降って地層のように層を成す雪がまた難物である。この「冬の閉じ込め (Winterkessel 敵に囲まれた真冬の戦場のこと)」のなかでは、クルーゲの表現によれば「寒冷教育」が欠かせない。寒さは、敵の攻撃も止まるため、サバイバルの条件であることも

に、たえざる脅威、凍傷、そして凍死の脅威でもある。そして冷淡でなければ、要するに仲間にも冷たくなければ、生き抜けないこともたしかだ。それ全体を指して「寒冷教育」と名づけている。

そうした描写に続いて突然「例えばこれはニュースだ。男の子は泣かない、というのは、現実感覚についてのニュースだ」と記されている。そして数ページ先の次の文章の伏線となっている。「ガルス大佐は、もうダメだと思っていた自軍の70台の戦車が、陥落寸前の自分たちの陣地から数キロの向こうから来るのが見えた時には、泣いた。1943年のことだ」<sup>(11)</sup>。戦車部隊が助けに来てくれたのだ。突然、ここに温かい気持ちが、リビドーが、衝動が、いや情緒がこみ上げてくる。泣かないはずの男の子が泣いた。こうした連関をクルーゲは「反＝現実の感覚」と呼んでいる。つまり、敗北という厳しい現実の中でも一瞬そうでない可能性が見える、しかしすぐ消える瞬間にこそ人間的な気持ちが蘇生するのだ。

さらにスターリングラード市内で下水道のマンホールの奥に隠れて、なんとか赤軍に見つからないように動かないでいたメッツガー伍長の話も出てくる。「ソビエト軍が立ち去ったら」抜け出して、自軍の方へ逃げのびようという算段である。しかし、ソ連軍も抜け目なく、マンホールに手榴弾を投げ込む。メッツガー伍長は重傷を負うが、それでも抜け出して、自軍への合流をはかる。「しかし、彼の靴からは血がどくどくと湧き出していた」<sup>(12)</sup>。

こうしたエピソードはスターリングラードとその周辺でいたるところにあったに違いない。一人一人の個人にとっては、そのたびに実際の戦場で助かった可能性、いわゆる反事実的 (kontrafaktisch) なものへの夢の方が、つまり偶発性の方が、そして偶然に生き延びることの方が、スターリングラードの戦いをめぐる大きな物語、大祖国戦争であれ、ドイツのナショナル・カタストロフィーであれ、そういったあとの物語よりはるかに重要である。そのことをクルーゲのテクストは暗示している<sup>(13)</sup>。

#### 4 クリミアのハイデガー——歴史は他のようでもあり得た

##### (1) ハイデガーの決断のモチーフ

さきほど触れた寒さと暖かさという二項対立は、ハイデガーがクリミア半島を訪問したシーンでも扱われている。国防軍がいとも簡単にクリミア半島を征服した直後の1941年秋、陸軍総司令部 (OKH) は、今なおパルチザンの散発的抵抗が続いてはいたというもの、ドイツの教授たちの代表団のクリミア半島見学旅行を組織した。電撃戦の正当化が目的であった。正当化のためにはあるプロジェク

(11) Kluge, *Chronik der Gefühle*, Bd. 1, S. 513.

(12) Ebenda.

(13) Kluge, *Chronik der Gefühle*, Bd. 1, S. 417-433.

トを教授団とともに宣伝する必要があった。つまり、この地域にはかつてゲルマン民族の一部である東ゴート人が住みついていたという痕跡を集めてもらいたかったのである。この半島の占領をゲルマン民族の歴史的使命として正当化するという親衛隊 (SS) の祖先崇敬計画 (Ahnenkult) の一環である。それゆえ参加したのは、「考古学者、ゴート人研究者、古代遺跡の専門家、そして哲学者など」であった。ハイデガーも招待された。記述は、フライブルクから飛行機を何回か乗り換えてその日のうちにクリミアのセバストポールに到着するという国防軍によってよく「組織された」旅からはじまる。

クリミアで教授団を迎えたのは、SSの悪名高き幹部の一人オーレンドルフ大佐である。実在した人物で、彼がクリミアのSSの特別部隊 (Einsatzgruppe D) を指揮していた。しかし、ニュルンベルク裁判では、彼の部隊の行った大量虐殺では有罪とならず、のちに1951年、いわゆるアインザッツグルッペ裁判で絞首刑に処せられることになる。したがって冒頭に述べたとおりで、この話は現実的フィクション (Realfiktion) である。というのも、ハイデガーがクリミアに派遣されたことはないが、実在のオーレンドルフのところに彼が招待で出かけた可能性は十分ある。つまり、形容矛盾を恐れずに言えば、現実的な仮定法過去なのである。

ところがこのクリミアで、クルーゲが現実的フィクションとして語るところによれば、そこで同じくフィクションだが、あってもおかしくないちょっとした面白いエピソードがおきる。ある朝、ユダヤ人たちがトラックに乗せて連れていかれるのを教授たちが見物していたところ、後ろの方から小さな女の子を連れた老女がフライブルク大学の「存在の哲学者」ハイデガーに近づいてきた。女兒は彼女の孫と思われる。ハイデガーはのちに当局の調べにこう答えている。「誰かが私の手に触れた感じがしました。私はその手を掴みました。黒い目の小さな老女が女の子の手を私の手の平に入れたのです。そこで私は握り返したのです。老女はすぐさま並んでいる人々の間に消えてしまいました」。せめて孫だけでも助けたい、と彼女は思ったのだろう。そしてハイデガーは、ナチスの信望厚く、それを楽しんでいたのに、奇妙な決断をすることになる。彼はこの子を自分の元に引き止め、預かっておこうと「決断」したのだ。『存在と時間』のなかのキーワードの一つである「決断」である。

「なにかものが我々に襲いかかり、決断させる。私は通りがかったオーレンドルフにこの子を引き止めておいていいかと、きいてみた。(……)。彼は、置いておいていいですよ、と認めてくれたのだ」。そしてハイデガーの文体を真似た表現が続く。「それは、生の広大さを根拠にした短い決断の時間であった。とどめ置く (halten) とは、根源的には守る (hüten) ことだ」。こうした言葉遊びもハイデガーのお家芸だが、「根源的 (ursprünglich)」とはハイデガーの好きな用語のひとつだ。



この決断の背景には、ドイツの人文主義的ギムナジウムの卒業生につきものの古代ロマンティシズムが潜んでいることをクルーゲは見逃さない。というよりもこの教養の虚妄性が実はテーマの一つである。古典古代当時はタウリスといったクリミア半島は、ゲーテの『タウリスのイフィゲーニエ』の冒頭部第12行目にあるとおり、イフィゲーニエが「ギリシア人の国を心の中で求めつつ（das Land der Griechen mit der Seele suchend）」<sup>(14)</sup> 幽閉されていたところだ。ハイデガーの心の中ではクリミア半島にはまだギリシア人が、その末裔が住みついていたのだ<sup>(15)</sup>。そして彼の手に委ねられたこの女の子は、イフィゲーニエの子孫かもしれない、と彼は考えてしまう。クルーゲが描くハイデガーは自分でも「同情などとは縁遠い」存在だと思っている<sup>(16)</sup>。にもかかわらず「この人間という生き物を所有していたい」と思う。そしてここで飛躍が生じる。文字通りの飛躍である。それはベンヤミンの描くゲーテの『親和力』への飛躍である。これは若干説明を要する。

『親和力』は田舎に暮らす上流の二組のペアがおたがいに相手のパートナーを好きになったまま、誰もが一步を踏み出す決断ができないうちに滅びていく悲しい物語だが、そのなかに作者のゲーテはノヴェレと称する短編を組み込んでいる。そこでは子供の頃から仲が悪く喧嘩ばかりしていた男の子と女の子が扱われている。女性は長じて結婚式を挙げる。披露宴は貸切の船での川下り。その舵を握るのはなんと、子供の頃から憎んでいたあの男の子。長じて船長になっている。だが、二人は本当は好きだったのだ。彼女は宴の最中に横にいる花婿と一緒にになる気はない自分に気がついて、デッキから川に飛び込んで自殺を図る。その跳躍に気がついた船長の彼も、その一瞬に彼女の跳躍が自分のためだったことに気づいて身を川に踊らせ、彼女を助ける。そして二人は結ばれるという話である。日常生活で我々がいかに決断をして一步別の道に踏み出さないかを、ゲーテなりに考えたテーマであろう。ベンヤミンに言わせれば、一生を権力との妥協のうちに過ごしたゲーテ自身への批判ともなっている。「この二人は欺瞞的に理解された自由のゆえにいっさいを捨てた跳躍を敢行したのではない。それゆえにこそ彼らは犠牲とならずに、決断が起きたのだ」<sup>(17)</sup> とベンヤミンは記している。

(14) 「古池やかわず飛び込む水の音」をある特定の文化圏の人なら誰でも知っている通り、この表現は、少なくとも標準的な中等教育を受けたドイツ語圏のメンバーなら誰もが知っている。

(15) 古代ギリシアで「タウリス」と思しき表現が本当にクリミア半島であったかどうかすら定かではない。Tauris という綴りの定着も18世紀のことであり、ゲーテの作品がこの「記憶」を強化した。

(16) Kluge, *Chronik der Gefühle*, Bd. 1, S. 426.

(17) ベンヤミンは以下の箇所でのこのノヴェレについて論じている。Walter Benjamin, *Goesethes Wahlverwandtschaften*. In: *Walter Benjamin, Gesammelte Schriften*, Bd. I-1, Frankfurt: Suhrkamp, 1974, S. 170. 引用も同箇所。この辺りについては、以下の拙著を参照。三島憲一

クルーゲは、ベンヤミンが論じるこのシーンを、クリミア半島でのハイデガーの決断と結びつけて次のように言う。「男の子は女の子を追って川に飛び込んだ。これこそは、『親和力』の中で唯一の幸福な運命 (Geschick) の瞬間だ」<sup>(18)</sup>。「運命 (Geschick)」とは、誰でも知っているとおりの「命運」などとも訳される言葉で、後期ハイデガーの好みの単語である。

ハイデガーはゲーテが嫌いだった。有名なダヴォスでのカッシーラーとの対決でもそれははっきり表明されていた。クルーゲはそのハイデガーにゲーテの小説の決定的な箇所を、ハイデガー本人が知る由もなかったベンヤミン的な意味で解釈させている。そして、自分がいたいけな女兒を引き取る理由にさせているところが重要である。ベンヤミン自身は決断主義者だった。しかしその知的一生は最後の自死の瞬間を除いて決して決断することのない決断主義者だった。ゲーテのこの小説についての評論を書いた時に、自分も複雑な交叉恋愛のなかで決断できずにいた。その彼が、ゲーテの小説の4人の主人公がおたがいの正式パートナーを傷つけないようにと、思いやりの中で永久に決断できなかったがゆえに滅びていく状況に対抗してノヴェレに言及しているのだ。そして、まさにその箇所をクルーゲはハイデガーに思い起こさせているという仕掛けである。ハイデガーがベンヤミンを読むことは同時代者である以上、あってもおかしくはなかったが、実際には出自の世界観があまりにも異なっており、あり得ない。それを逆手にとってあり得たかもしれない非現実の現実としてクルーゲはこのシーンを読者につけつける。

クルーゲによるベンヤミン理解にハイデガーを重ね合わせると、ここでの決断とは、日常生活で我々が毎日やむをえず従っている「盲目の伝統」(ハーバーマス)からの脱出を引き起こす決断のことである。いわば慣れ親しんだ妥協と従属の連関から未知の領域に飛び出す、跳躍する瞬間の可能性である。クルーゲから見れば、人類の長い歴史は破局と敗北の連鎖であった。だが、その連鎖からの脱出は瞬間において可能だということである。「今の事態がこのまま続くことこそ破局である (Dass es „so weiter“ geht, ist die Katastrophe)」という有名なベンヤミンの断章が思い起こされる<sup>(19)</sup>。破局の連続に抵抗して、「新しいこと」が始まらねばならない、というのだ。

## (2) 新しい可能性—反事実的なものの思考

それはまた、ハンナ・アーレントが飼い葉桶に眠る幼児キリストにすべての新しく生まれてくる幼児の象徴を見たのと同じである。そこには「これまで予想も

『ベンヤミン—破壊・収集・記憶』(講談社, 2010年), 226-230頁。

(18) Kluge, *Chronik der Gefühle*, Bd. 1, S. 426.

(19) Walter Benjamin, Zentralpark. In: *Walter Benjamin, Gesammelte Schriften*, Bd. I-2, Frankfurt: Suhrkamp, 1974, S. 683.

つかなかったことへの期待」がある、というのだ<sup>(20)</sup>。永年の暴力の連鎖を破る、これまでとはまったく違ったあるなにかへの希望がいつさいの誕生と結びついているとアーレントは書いている。クルーゲも、ベンヤミンに倣ってさらにラディカルに、つまり誕生だけではなく、いついかなる時でも、そしてどんなところでも暴力連鎖を打ち破ることが可能なのだ、とこのハイデガーのシーンで暗示する。ベンヤミンのオリジナル表現はこうだ。Kein Augenblick kann wissen, was der nächste bringt（次の瞬間になにが起きるかは、どんな時でもわからない<sup>(21)</sup>）

この考え方の共通の根は遡れば、アウグスチヌスにある。アーレントが博士論文のテーマにしたアウグスチヌスでは、「人間はこの世においてこれまでと異なる新しいことをするために創造された（initium ut esset creatus homo）」と述べられている。つまりどんな時でも、どんな場合でも新たな自由の行動は可能だというのだ。社会学者ペーター・ヴァーグナーは社会学の言葉に翻訳して「人間の行為可能性（menschliche Handlungsmöglichkeit）」と表現する<sup>(22)</sup>。だが、多くの新しい試みと同じで、ハイデガーの決断もやがて日常に回収される。イフィゲーニエが投影されたこのユダヤ人の女兒は、ハイデガーが部屋を留守にしているあいだにいなくなり（多分オーレンドルフの手下につれていかれたのだろう）、この哲学の大先生も、たいして探すこともしないで、また飛行機に乗って、フライブルク大学の日常生活に戻る。

クルーゲがいわゆるモダニズムのさまざまな手法をいわばアーカイブから取り出すように駆使しているのがわかる。異化効果、シュルレアリスム的なショック効果、映画のモンタージュ効果、そしてベンヤミンの好む引用効果などである。そしてこれらのコラージュをクルーゲは「短縮・集約の技術（Technik der Verkürzung）」と名づける。短い、時には一ページにも満たない空間に現代史の暴力の記憶を集約する技術である。

そして、この短縮ないし集約の技術の知的内容はいわゆる「反事実的なもの」の思考（Denken des Kontrafaktischen）である。彼はそれをあるインタビューで「可能性の形式」あるいは「選択法 Optativ」とも呼んでいる<sup>(23)</sup>。簡単に言えば、「すべては違うようでもあり得た（Es hätte alles anders kommen können.）」ということである。前述のインタビューではこうも述べている。「もしも1928年にある女性教員が他の先生たちと一緒に行動を起こしていたら、33年はなかったかもしれないのです。そうすれば36年もなかったでしょうし、45年もなくて済んだでしょ

(20) Hannah Arendt, *Vita Activa*, Stuttgart: Kohlhammer, 1959, S. 15f.

(21) Walter Benjamin, Der destruktive Mensch. In: *Walter Benjamin, Gesammelte Schriften* IV-1, Frankfurt: Suhrkamp, 1974, S. 398

(22) Peter Wagner, *Fortschritt. Zur Erneuerung einer Idee*, Frankfurt: Campus Verlag, S. 49.

(23) Friedensstifter. Interview mit Alexander Kluge. In: *Die ZEIT*, 23. Okt. 2003.

う」。アメリカのドイツ文学研究者であるヨハネス・フォン・モルトケが、彼のクルーゲ論で「接続法2式の文学」<sup>(24)</sup> という表現をしているのも、うなずける<sup>(25)</sup>。本稿の冒頭に、クルーゲが大学で講演すれば大講堂が満員になる理由はどこにあるのだろうか、という問いを発したが、青春が求めるもの、つまり親たちの作った軌道以外のもの、このままでないものへの希望と夢を、モダニズム芸術の最先端の手法で、多くの場合、いわば一筆書きで描き出すところにも、その理由があるだろう。

## 5 急進的批判

その際に重要なことは、この「接続法2式」の文学は「急進化」の文学でもある、ということである。日常生活であれ、重要な歴史的イベントについてであれ、ちょっとした違和感を感じることはだれにでもあるだろう。人権についての議論に関してですら、そこに時として高慢な自己満足の匂いのゆえに違和感を感じることもあるだろう。そうしたときに考えたことを記述する、つまり、「今のようではなかったらどうだろう」という考えを記述することで、そうしたプロセスへのラディカルな「ナイン」を表現する、そうしたものとしてクルーゲは自分の散文を考えている。クルーゲの親友であったアドルノはすでに『否定弁証法』のなかで、「考えることそれ自体がすでに(……)否定することである。考える行為に外から押しつけられるものに対して抵抗することである」と述べているとおりである<sup>(26)</sup>。しかも、クルーゲはこの点ではアドルノ以上にラディカルである。なぜなら、「考える」だけでなく、「感じる」、つまり思考のみでなく、感情にもこの現実への抵抗の源泉を見ているからである。本論で扱っている作品集のタイトルもまさに『感情の年代記』であった。

「急進化」ということは妥協を拒否する、あるいは避けるということでもある。

(24) Johannes von Moltke, *No Place Like Home: Locations of Heimat in German Cinema*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 2005, S. 56f. 著者はモルトケ家の子孫と思われる。抵抗運動に参加したヘルムート・ヤーマス・フォン・モルトケは1943年に逮捕、1945年1月に処刑されたが、夫人のフレヤ・フォン・モルトケ(1911-2010)は終戦直前に二人の息子と共にドイツを脱出し、やがてアメリカに移住した。

(25) アミール・エシェルはこれに関して次のように書いている。„For Kluge it is not enough to strive for a realist representation of man-made catastrophes. This type of realism is, for him (and I agree), often accompanied by the underlying notion that the *factual* catastrophic outcome was somehow *inevitable*. Rejecting an exclusively realist depiction of a disaster such as the Holocaust – that is, accounting for the Holocaust in the subjunctive of a literary work such as “Heidegger in the Crimea” – underlines how by excavating the past we use past historical experience to find *Auswegen*: we ponder what could have also happened and thus may, just may, prevent a coming disaster.” Amir Eshel, *Futurity*, Chicago: University of Chicago Press, 2013, S. 65.

(26) Theodor W. Adorno, *Negative Dialektik*, Frankfurt: Suhrkamp, 1966, S. 30.

通常、とてつもない政治体制の中では、もっとひどくならないことを目指して批判派も妥協をする。しかし、そうした中間の道 (Mittelweg) を避けることをクルーゲは進言する。クルーゲがエドガー・ライツと撮った有名な映画のタイトルは『危険と大きな危難にあって中間の道を行くのは死を選ぶのと同じ』というものであった。この言葉は中世後期の著述家フリードリヒ・フォン・ローガウ (1605-1655) に由来するそうだが、クルーゲが再活性化していわゆる *Geflügeltes Wort* となった。ユルゲン・ハーバーマスも、ブレクジットについてのイギリスの国民投票の結果を受けたインタビューでこの標語を使っている。「政治指導者たちが、歴史の動きをしかたないとして、あきらめて身をまかせるのは、決してリアリズムのしるしではありません。「危機の際に中間の道を行くのは死を選ぶのと同じ」—私の友人のアレクサンダー・クルーゲのこの映画のタイトルのことを、私はこの数日しきりと思い出していました<sup>(27)</sup>。もちろん、他の方法もあったかどうかは、後で振り返って初めてわかることには違いありません。しかし、他の方法をためしもしないで放棄する前に、自分たちの時代は、未来の歴史家の現代から見れば過去なのだ [つまり、後から見てどう見られるか、やはり他の方法もあるのではないか] という考え方をしてみなければならぬはずだ<sup>(28)</sup>。

クルーゲの仕事の仕方を見るために、ちょっと傍注だが、このタイトルで言われている「中間の道 (Mittelweg)」とは、フランクフルト大学の近くに現実に存在する道の名称であることもつけくわえておきたい。この映画は、その通りにある古い建物を壊して、新築のアパートを作る利益中心の計画への抵抗運動が出发点である。デモ隊と警察が渡り合っているこの道を行くのは、実際に非常に危険だった。

「これまでと同じにやっっていけばいい (weiter so machen)」に対するこうした抵抗は、例えば50年代、60年代の西ドイツで暗黙の前提であった偽りの連続性への批判でもある。1957年のアデナウアーの選挙標語「実験はやめよう (keine Experimente!)」がその典型である態度への批判である。と同時に、個別的な経験を感情を込めて語ることが、そうした経験を飲み込み、吸収し、押しつぶしていく大きな語り (例えば、「戦後の経済成長」「過去の克服」「民主主義の定着」「東西対立の崩壊」などというナラティヴ) への批判ともなる。「過去の克服」とか「民主主義の定着」といった一見ポジティブな話でも、それによって押しつぶされていく個別経験を重視することこそ、そうしたサクセスストーリーがいやらしさと傲

(27) 1974年製作のこの映画は、行為のあと寝ている男の財布を抜き取る夜の女と、フランクフルトでストライキや家賃値上げに抗議するデモなどを本国に報告する東ドイツのスパイを同時に描いている。

(28) Die Spieler treten ab. Interview mit Jürgen Habermas. In: *Die ZEIT*, 9. Juli 2016. なおこのインタビューは拙訳が解説とともに『世界』(岩波書店) 2017年3月号に掲載されている。

慢を宿さないために不可欠であるとする感じ方、いわば神経のあり方である。クルーゲはこうした小さな個人とその周りの個別的経験を「素朴な多様性 (primitive diversity)」とも呼んでいる。こうした「素朴」で「多様な」小さなシーン、先のスターリングラードで突然現れた味方の戦車やマンホールに隠れたドイツ兵といった小さなシーンを収集することによって、破壊の時代の壮大な抵抗のアルバムが、いわば文学的ゲルニカができあがる。

## 6 破壊の追憶—極小化による救済

こうした追憶の仕事は、逆説的にもプルーストにつながるものだとクルーゲはインタビューで繰り返し述べている。実際にはヴァルター・ベンヤミンを経由してのプルーストの継承である。プルーストは、19世紀末のベル・エポックという失われた時代の追憶を、その大作で試みた。そのプルーストを継承した最初の存在がベンヤミンである。あの大作を友人とドイツ語に訳した（完成はしなかったが）彼が『パサージュ論』によって19世紀の首都パリの無数のシーンと膨大なテクストの引用を収集したことは、周知の通りである。

言い伝えによると、文学を志していたクルーゲは、アドルノが「君、文学はやめたほうがいいよ。どんなにいい小説を書いても、プルーストにはかないっこないから」と言われて、悔しがったそうである<sup>(29)</sup>。それゆえにか、逆にプルーストの方法のベンヤミン的な換骨奪胎のさらなる換骨奪胎を試みた、ということであろう。ベンヤミンの『パサージュ論』における19世紀の（実現しなかった）夢の収集に対して、今度は破壊の時代の、もしかしたら破壊されないで済んだかもしれない可能性を破壊の断片を収集することで試みている。ベンヤミンの「もしかしたら他のようにも歴史はなっていたかもしれない」という思いを、ナチスの破壊の後で、破壊された断片の収集によって、さらに継承したのがクルーゲの記憶の仕事である。だが、彼自身上記のインタビューで述べているように、収集した断片を正しい配置 (Konstellation) にもたせれば、歴史は変わると思っていたベンヤミンほど彼は、オプティミスティックではないようだ。きわめてペシミスティックであったベンヤミンをオプティミスティックというのだから、相当なものである。破壊の時代のあとでの希望は、さらに極小化され「短縮」されることで救済される、ということなのだろう<sup>(30)</sup>。

(29) <https://www.kluge-alexander.de/nc/aktuelles/details/artikel/die-wirklichkeit-selbst-ist-der-erzaehler.html> (2018年12月1日閲覧)

(30) プルーストと『パサージュ論』の関係については拙著『ベンヤミン—破壊・収集・記憶』（講談社学術文庫、2010年）第8章参照。